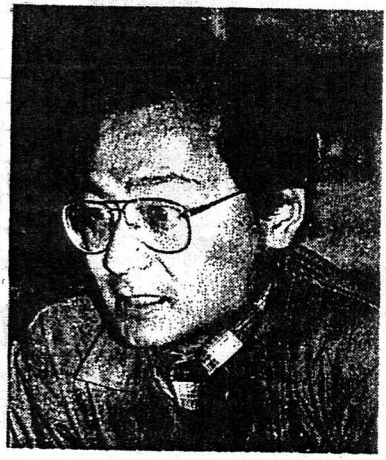
「隣の国だけど、思っていたよりずっと遠かった」。サハリンから帰国した日、函館空港でポツリ。ロシアでの非政府組織（NGO）活動の難しさを漏らした。

アジア医師連絡協議会（AMDA）の第一次医療チームの一員としてサハリン地震の被災地へ。地震発生（日本時間五月二十七日）から二日後、チャーター機で現地に入る予定だったが、入国や活動許可が下りず、結局治療を始めたのは四日後となった。それでも、外国の医療救援団体では最初の医師だった。

「サハリン州政府に『医師は足りている。薬だけ置いて帰れ』と言われた。日本語の説明書しかない薬品を置いて帰るのは、あまりに不親切。丸一日かけ、私たちの活動を説明、州政府に理解してもらった」

ユジノサハリンスク市にある州立中央病院では透析治療グループに加わった。当初、地震による入院者は六人だったが、帰国前日の六月四日には五十人にも上った。うち六人は、阪神大震災でも報告された、筋肉組織が破壊されて腎（じん）不全になる挫滅症候群（クラッシュシンドローム）だった。

「患者はおろか医師も英語が通じないから身ぶり手ぶり。いつまでも滞在できないのでロシアの医療環境に合わせるよう心掛けた」という。



サハリン地震で外国人として最初に被災者を治療した医療チームの

早川達也（はやかわたつや）さん

一九九一年、北大医学部六年生の時、友人から誘われAMDAに加わった。同年八月ネパールに。その後もユーゴスラビアなどで活動した。現在、市立札幌病院救急部に勤務、独身。出身地の京都市にいる母親は「あなたのすることですから」と信頼、二十八歳の息子を温かく見守る。

海外に先駆けて日本のNGOの医師が医療活動を開始したのはニュースだが、「七十二時間以内に活動を始めなくちゃ」。冷静で落ち着いた口ぶりながら、一言一言に熱い志が伝わってきた。